

## 5. 楡葉町 復興事業における新産業の導入や、帰還された方との懇談 片瀬 範雄

◇訪問日時：令和4年12月10日（土）11：30～15：00

◇場所：農家レストラン「げんき庵」&楡葉町内視察

◇対応者：「げんき庵」主人 山内 幸一氏（山内 容子さま）

楡葉町政策企画課主幹 渡邊 敬 氏

1. 楡葉町の概況 一面積 103.64 km<sup>2</sup>・震災前人口 8,011 人  
津波被災高さー10.5m 津波犠牲者 13 名  
北側の富岡町境に福島第2原子力発電所が立地しているが、地震後休止している

### 2. 原発事故による避難関係一

- ・平成23年3月12日ー福島第1原子力発電所から半径20km圏内であったことから全町民避難開始
- ・平成27年9月5日ー楡葉町内全域避難指示が解除  
(福島第1原発の南側にあり、比較的汚染度が低かったことや除染が完了したことから、4年半で帰還が可能となっている)
- ・国道6号は平成26年に全線通行可能になっている  
(国道6号は、楡葉町以南は震災直後から通行可能であったが渋滞が激しく、町役場の職員は避難地いわき市中心部から約30kmを2時間かけて通勤したと聞く)

避難指示区域の概念図(R4.8.30時点)(福島復興局資料 関係箇所を切取)



### 3. 帰還状況

- ・令和4年11月現在一住民登録者数 6,655 人の内、町内居住者 4,277 人 (64.2%) で双葉郡内の沿岸被災自治体 (広野町は原発避難指示は無し) では、一番帰還居住者率は多く、令和元年に訪れた時の住民登録者の 6,850 人より減少しているが、居住者数 3,853 人 (56.2%) より徐々にではあるが、増えている
- ・未帰還者のうち、主な福島県内居住者は、いわき市 2,107 人 (R元 2,594 人)、郡山市 44 人 (R元 66 人)、茨城県や埼玉県など県外居住者は 426 人 (R元 543 人) である
- ・仮設住宅は平成30年3月末に解消している
- ・帰還に際しての生活再建支援として、帰還費用の補助・応急仮設住宅退去時の給付金・帰還家屋の清掃費用助成などをおこなっている。家屋や庭の除染は完了しているが、4年以上居住しないと、屋根瓦の葺き替えや、壁などの補修、家具や電気製品の入れ替えなど相当の費用が生じている

### 4. 楡葉町の復興への取り組みのヒヤリングー楡葉町政策企画課 主幹 渡邊 敬 氏

#### 4-1. 楡葉町の復興計画と進捗状況など

- ① 第2次復興計画ー平成28年に策定
- ② 策定に際し、町民意見の聴取するため、「町政懇談会」を開催し、生活環境への提案として、医療・介護・教育施設、警察署・銀行・買い物施設などの整備を受けており、計画の中に反映しているし、後程それらの施設を視察する



渡邊主幹の説明の様子

- ③ 町の再建のためには、「夢のある計画」が主にならざるを得ず、大きすぎると思われる箱ものが多くなっているが、書かざるを得ないのが復興計画であった

(後程の質問や現地視察の中では、身の丈に合った着実な進め方がなされていると感じたが)

- ④ 復興事業のため、震災前には約 50 億円の標準財政規模が、一挙に約 200 億円規模となり、それが数年続いた

令和 4 年度は約 88 億円となり、前年より 6 億円縮小した

その執行にあたり、ハードな復旧・復興事業が多くあり、技術系職員がいない中、長崎県壱岐市より、職員派遣を受けており、今も神奈川県から職員派遣を受けている

- ⑤ 震災前から、双葉郡全体での広域合併の声もあったが、電源 3 法による交付金や、東京電力の固定資産税もあることから、各町とも独自施策が可能であるとして、合併はされていない

- ⑥ 計画の中に、双葉郡全体を捉えた、医療面や福祉面などで、広域的な展開も必要と思われる

- ⑦ 帰還に対する住民の放射線量の対する不安は残っていることから、事後モニタリングは当然続けている (平成 26 年 3 月で家屋や田畑等の除染は終了)

現在の放射線量は  $0.20\mu$ シーベルトで除染前の平均値より 72%減少している

飲料水の水源は木戸川上流の「木戸ダム」であるが、24 時間モニタリングを行っており、異常値が出た際、即時停止システムを整えているが、不安感を抱く人はゼロでは無い。

#### 4-2. 第 6 次檜葉町町勢振興計画(令和 3 年作成)ー

現在、今後 10 年で目指すまちづくりとして「ならばチャレンジプロジェクト」を作成し、取り組みを進めており、①長所を伸ばす②住みよい魅力的な③笑顔とチャレンジあふれる④取り組みの積極的 PR⑤ファンを増やす⑥移住・定住の促進は、実に簡単明瞭な言葉であり、K-TEC は今後も全被災地のファンであらねばの感を持った

#### 4-3. 震災後の拠点整備

- ① 「笑フルタウンならば」と「竜田駅周辺整備」を行っている

- ② 「笑ふるタウンならば」の主な誘致施設など (視察時の現地状況は後述)

・商業施設「ここなら笑店街」を平成 30 年に開業している。スーパーやホームセンター、そして 11 の飲食店などは、地元の方々が進出しており、あえて大型企業の誘致は行っていない

・医療ゾーンには小型ではあるが、県立ふたば復興診療所と歯科医院・薬局が立地している

・交流館として「ならば CANVAS」

・住宅関係ー災害公営住宅 140 戸 (津波被災者や全壊家屋居住者対象) 分譲地 1 工区ー18 区画 (戸建て用で完売) 分譲地 2 工区ー37 区画 (内戸建て用 31 区画、 (配布資料より)

分譲地 2 工区ー37 区画 (内戸建て用 31 区画、集合住宅用 6 区画で、主に新規進出企業や原発廃炉関係機関の従業員の宿所も考えている)、

- ③ 竜田駅周辺整備も駅の橋上化や駅前広場整備など進められているが、今回は視察は出来なかった

##### 笑ふるタウンならば

◆ 町民や町内事業者の暮らしの再生と新たな居住を促進するため、新しい生活の拠点として、住宅・医療・商業・交流施設等を集積。



(配布資料より)

## 5. 帰還者である、農家レストラン「げんき庵」の主人山内 耕一氏の想いのヒアリング

(渡邊主幹の補足説明も含め)

- ① 帰還せず、避難先と檜葉町の両方に家を構える人もいる
- ② 避難している人たちには、色々な事情があるだろうから、積極的に帰還を求めることは差し控えている
- ③ 帰還者は高齢者が多く、福祉部門は未だ不足面はある
- ④ これまで原発立地により、経済面の恩恵もあり、地方交付税不交付団体であった
- ⑤ 5年間の避難生活のため、米づくりは新たな田づくりから再開する必要であり、農機具の再整備が必要であったので、約1haの農地は従弟に委託して営農して貰っている
- ⑥ 小規模農家(1ha程度)は、担い手や農機具整備の課題もあり、⑧に記載の畑作中心となりつつあるが、米作は約20ha規模の専業農家に(ちなみに従弟は約20haの営農をしている)、または約40ha規模の農業法人に委託している。結果震災前555戸が約410haで営農していたが、現在は61戸が約327haの耕作となっており、水利確保として木戸池などの整備を行っている
- ⑦ 米はR3に全量全袋線量検査を行った結果、5,514点測定の一部が限界値未満であった
- ⑧ 新たに、血圧抑止やストレス緩和、睡眠の質の向上につながると言われている「ならば名産GABA米」の生産を広めていきたい
- ⑨ 耕作放棄地対策を含め、新たな畑作農業として「サツマイモ」の大産地化を目指しており、大阪の白ハト食品工業の社員派遣も受け、営農指導から全品買い上げ・加工に繋がる6次産業化が進んでいる。現在40戸の農家が52haを作付けしており、収穫量は約800~1,000トンを生産している。サツマイモは加工するので収穫時の傷に拘ることなく完全機械化でき手間もかからない。
- ⑩ 端境期には玉ねぎや、花き栽培も約10haで行われている
- ⑪ 畜産については、震災前43戸が450頭を飼育していたが、現在は酪農1戸147頭、繁殖牛4戸182頭
- ⑫ これらへの支援として、原発被災地ゆえの国支援を受け農業施設として「カンントリーエレベーター」「育苗施設」「甘藷貯蔵施設1,500~2,000トン貯蔵規模」などの整備しており、まちも「いきいきアグリ復興基金」を創設して応援したり、生産物の販売を「ならばSANマルシェ」など行っている



甘藷貯蔵施設

## 6. 山内氏への質問と回答を中心に渡邊主幹を含め、意見交換した事柄

Q1, 帰還者の住民登録者6,655人中、帰還者の64%、4,277人の内訳は？

A1. 64%の中に、新規参入企業など民間人15%が含まれているし、原発廃炉関連の人たちもいる。ただ住民登していない人もある。避難期間が4年半と他町より短いこともあり、従来住民の帰還者数は約50%程度。しかし頭打ちの感はあるが、「全員帰還するぞ」を目標に取り組んだ

Q2. 農家レストラン「げんき庵」の開業動機や来客者の様子や経営状態は？

A2. 震災前の50歳ごろから退職後の生活を相談し、構想は浮かんでいた。奥さんはまちの社会福祉協議会職員として見守り関係の仕事をしていた。平成23年の被災後、いわき市の4年半ほど避難し



ていたが、平成 27 年に帰還した。平成 30 年に奥さんの退職を機会に「げんき庵」を開業した。目的として、帰還された高齢者の皆さんの生きがい対策となるよう、「自然食品の料理を提供し明るく健康に集える場所の提供したい思いから開業した。食材は地産地消をもっとうに考え、魚類は「常総物」、野菜は「自家製」を中心としている。当日 2 組 10 名程度の高齢者が昼食を楽しみ、団欒している姿があり、当初の目的通りの展開を感じた。

(我々も「アカムツの煮つけ」をメインとした昼食を頂きながら、和気あいあいと意見交換が出来た)。

開店にあたり、助成などは一切受けず、自力で行っており、昭和 63 年に建築した家だが、4 年半の避難生活でかなりの補修の必要であったが、間取りは変えずに修理やリフォーム、台所の改善などしており、将来は他のことも行いたいと考えている。お客さんは町外からも来て貰っており J ビレッジに



「げんき庵」前で(奥さんも誘ったが)合宿に来る外国人の来客もあり、そこそこの経営状態である。このような形態の店を做って、開店を目指す人もいるかもしれないが、十分な条件整理は必要と思う

Q3.各地に設置していた支所の状況は？

A3.いわき市と会津若松市においていたが、帰還指示解除後、不便で乱暴かもしれないが、檜葉町役場にて一元化をお願いした。仕事や子供のことから帰還できず、第 2 の故郷になる家族もある

Q4. 原発事故に対する補償は？

A4. 平成 27 年 9 月の避難指示解除後は無い。3 月 11 日の檜葉町に住民登録があり、他の自治体での居住者が対象の、医療費免除などは継続している。

Q5.自主避難者の精神的な補償は充分であったか？

A5. 妊婦などに対する議論が噴出している

Q6. 避難地での人間関係は？

A6.嫌がらせはあったし、子供が馴染めず帰還事例もある。車の窓ガラス割りや、ペンキで帰れの落書きなども、また「他県の避難者とは遊ばないでね」という、親の会話もあったし、出て行けとの言葉もあったが、今は少なくなってきた

Q7. 教育環境の整備はどのように進んでいるか？

(配布資料より)

A7. 教育環境の整備は帰還者増のため最大の課題であるが、生徒数は伸び悩んでいる。子育て世代の増加で、こども園は増えつつある。小中一貫教育で始めたが、今は独立している(小中学校は同一敷地内)。

	震災前 (H22年度末)	町内再開時 (H29年4月)	現状 (R4年11月現在)
小・中学校	686人	105人	174人
うち小学生	432人	62人	129人
うち中学生	254人	43人	45人
こども園	247人	38人	126人

塾が無いので、帰還への魅力に限界感はある。

しかし、小中学校は町立であることから、自由裁量の余地がある。学校共同センターを開設し、田舎暮らしを楽しませる、田舎の良き環境の中、肩ひじはらない田舎暮らしを楽しませたい。中学生によるまちづくりチーム「中学生の窓」も出来ており、キャリア教育として、大学生の支援を受け、アンテナショップを東京で開設している。しかし中学生の数が少なく、野球などのチーム競技などが出来ない悩みも有る。

Q8.双葉郡内の被災自治体間の連絡会議などは行っているのか？

A8.新規事業の導入などに対する、財源調達方法やアイデア出しなど行っている。楡葉町はその中でトップを走りたい気概で取り組んでいる、医療過疎地であることから、各町が分担した医療施設整備も必要と考えている。今はいわき市の病院を頼っているが、突発的な病に対して不安感もある。

子供が成長している世代では、学校などの関係から帰還がしづらく、帰還者の高齢化率は37%もある中、在宅介護支援施設の進出が無い。施設管理者も営利主義の感はあり、進出に戸惑っているようであるが、どこかの町に拠点を置き、各町に支所でもおいて、設置を考えて欲しい。

Q9. 以前から居住していた、原発関連施設勤務者の動向は？

A9.震災前の3,141戸の所帯の中、家族の誰かが、東京電力や関連企業に勤務しており、矢張り依存度は高かった。現在は他の事業地で勤務している。これらに変わる産業の導入にも力を入れており、南・北産業団地の整備もしており、ベンチャー企業の進出も進んでいる。用地単価もいわき市内なら20万円/坪だが、楡葉なら5万円/坪であり、国・県の支援策以外に町でも支援策をとって、企業誘致に努めている

## 7. 町内施設視察状況

町内の状況や説明を受けた場所、新規住宅団地・  
笑みフルタウンならは・新規参入企業地、そして集客観光施設などを視察した



### ① 木戸川と農村風景

木戸川は以前は「鮭」の遡上が多く、漁獲量も日本一であったが、しかし去年は 木戸川と広がる農地  
去年は、400匹しか捕れなかった。アユも遡上している。農地は大規模用に整地が成されている

### ② 常磐線に「Jビレッジ駅」の新設

ワールドカップに合わせ、JR常磐線に新たな「Jビレッジ駅」が新設されており、新たな観光施設の入り口が出来ている  
遠方に見える煙突は広野町内にある東京電力「廣野発電所」



### ③ 観光拠点「みるーる天神」

太平洋が一望できる高台に

「みるーる天神」があり、広大な敷地にはアドベンチャー広場や芝生公園が桜並木の中に広がり、オートキャンプ場には、家族連れの姿もあった。「天神岬温泉しおかぜ荘」や「岬ロッジ」もあり、今回渡邊主幹から宿泊を勧められたが、スケジュール上出来ず、次は



弾丸ツアーで無い、各町が誇る施設をのんびりと観光しながら、訪問したいものである

### ④ 災害公営住宅と企業誘致用宿舎

140戸の津波被災者などの公営住宅や、企業誘致用宿舎が一体で整備されている





⑤ 「笑みフルタウンならは」



地域の商業者が中心となった商店街や、コロナ施策としておこなわれている「全国旅行支援全国割」の商品券が使える地元産品スーパーなど店舗や医療施設などが集積しており土曜日であったことから多くの来場者で賑わっていた。（他の町の小規模店舗では、手間又は設備のためか、全国割は使用できず、活性化に繋がっているか疑問）

⑥ 健康増進とスポーツ振興施設

総合グラウンドは震災前から整備されており、震災後、檜葉スカイアリーナが新設されており、遠方からも丸屋根が見える素晴らしい施設である。プロ・アマ



大会や合宿の誘致を進めている。また、J ビレッジはサッカーピッチ 11 面を主に、R 元年全面再開、ワールドカップの会場となり、2021 年オリンピックの聖火リレーは檜葉町役場を出発して、J ビレッジまでが始まりであった

⑥ 交流館「ならは CANVAS」

建設にあたり、町民提案を最大限に反映しており、明るく開放的で、木材使用も多く、温かい



雰囲気醸している。利用はセミナー室を除き、予約もいらず、自由勝手に利用が可能で、ソファやテーブルには、年配者が会話を楽しんでいる姿があった。

⑦ 新規産業の進出

国や県、町の支援策として、建設・設備助成、税の控除、利子補給、操業奨励金などの支援に加え、地価が安いこと、常盤自動車道のスマート IC から近いことなどの条件から、業種や規模など全を知ることは出来なかったが、南・北の工業団地内に進出企業の建物を見た



檜葉町遠隔技術開発センター

被災原発の廃炉に使用するロボットの研究開発機関である「檜葉 遠隔技術開発センター」が 2015 年 10 月に南工業団地内内で研究管理棟の開設以後、2016 年 2 月試験棟も完成し、2106 年 6 月より、本格的に「廃炉創造ロボコン」施設と研究が進められている。



業種は不明だが、大規模工場をかなり受けられる